

高長虹の創作と思想(下)¹

—初期から狂飆社前期にかけて—

内 藤 忠 和

上篇目次

1. はじめに

1. 1 高長虹（1898 年—1954 年）について

1. 2 先行研究

1. 3 本稿の位置づけと目的

2. 初期から太原時代

2. 1 翻訳詩と初期作品

2. 2 太原『狂飆』月刊

3. 北京“狂飆運動”時代

3. 1 北京『狂飆』週刊（1924 年 11 月—1925 年 3 月）

3. 2 魯迅との出会いと『莽原』週刊（1925 年 4 月—1925 年 11 月）

高長虹が魯迅のもとを初めて訪れたのは 1924 年 12 月 10 日の夜のことであり、魯迅はこの時のことを：「(十二月十日) 夜風。长虹来并贈『狂飆』及『世界語周刊』。(12 月 10 日) 夜、風。长虹来る、『狂飆』及び『世界語週刊』贈らる。)」²と簡潔に日記に書き残している。

一方高自身はこの訪問を後年以下のように回想している：「在一个大风的晚上我帶了几份『狂飆』，初次去訪魯迅。这次魯迅的精神特别奋发，态度特别诚恳，言谈特别坦率，虽思想不同，让使我想象到亚拉籍夫与绥惠会略夫会面的情形之仿佛。我走时，魯迅谓我可常来谈谈，我问以每日何时在家而去。此后大概有三四次会面，魯迅都还是同样好的态度，我那时以为已走入一新的世界，即向从来没有看见过的实际世界了。我与魯迅，会面不只百次，然他所给予我的印象，实以此一短促的时期为最清新，彼此时实在为真正的艺术家的面目。

（とある大風の吹いた夜に私は『狂飆』を数部手に、初めて魯迅のもとを訪れた。この時魯迅の精神状態は特別奮い立っており、態度もとりわけ誠実であった、話しぶりもととても率直で、思想は異なるといっても、アラジエフとセヴィリヨフが対面したときの情景を彷彿とさせた。私が立ち去るとき、魯迅は私にいつでも話に来て良いと言い、私は毎日何時ごろ在宅か聞いて帰った。この後概ね三四回対面したが、魯迅はやはり同様の良い態度であった、私はその時新たな世界に入ったように思った、すなわち従来目にしたことのない現実の世界だと。私と魯迅は、対面したこと百回にとどまらないが、彼が私に与えた印象は、実にこの短時間のものが最も清新であり、実に真の芸術家の風貌とでもいうものがあった。）」³

以後高長虹は頻繁に魯迅のもとを訪れて交遊を深め、1925年4月11日には魯迅に招かれて荊有麟、向培良、章衣萍たちと『莽原』創刊準備のための宴席に参加し、遂には共に4月24日『莽原』週刊を立ち上げることとなる。

3. 2. 1 現実との格闘

この『莽原』週刊を舞台に、高は魯迅とともに中国の思想革命に取り組み始め、従来以上に現実社会に目を向けた散文、評論を多く発表するようになる。

『莽原』創刊号（25年4月24日）に発表された「綿袍里的世界」は、高が綿入れを質に入れたに行った時の経験に基づく散文であり、日常の些事の描写を通じて醜悪な世界や人類への嫌悪感を表明している；「世界不是比这道渠更为污秽，人类的毒菌毁灭我的灵魂不是比致病更为可厌吗？（世界はこの水路よりもさらに汚れており、人類の害毒は私の靈魂を滅ぼし、病原菌よりもさらに憎らしいではないか?）」⁴。続く『莽原』第2期（25年5月1日）に発表した散文「什么」においては、深夜隣室で妓女が接客する物音に目覚め、彼女の境遇に思いを馳せながらも、「死灭了的让他死灭去好了！但是生的呢？…（死滅するものには死滅させておけ！だが生きているものは?）」⁵と旧来の悪習に身を委ねる人々への怒りとそれでも人々を目覚めさせようという意志を読み取ることができる。

こうした意志は、『莽原』第4期（25年5月15日）に発表された「永久」や同時期に『京報副刊』142号（25年5月8日）に掲載された「刹那的心象」といった詩歌からも読み取ることができる：

「在一座大的古城里，／甜睡了许多许多的生命，／生命也偶然做着好的与不好的梦，／他们满足在他们的梦里。（ある大きな古城において、／数多数多の

生命がぐっすり眠る、／生命たちも偶然の良い夢と良からぬ夢を見て、／彼らは自身の夢の中に満足する。〕⁶これは「利那的心象」の一節である。この古城の中で眠り続ける生命の姿は、いまだ目覚めぬ中国の人々を連想させ、詩人は彼らに自ら目覚めよと呼び掛ける。

また「永久」では目覚めた学生たちの闘争とそれを弾圧する警察、流れる血に倒れる人々の姿を描き、そして詩人はそれらを乗り越えてどこまでの「突進」せよと声を上げる：

「血！／无尽地流着。／躯体倒了，／而血矗立地流着。（血！／尽きることなく流れる。／身体が倒れても、／血は聳え立つかのように流れる。）」⁷

「倒了，／倒了，／快从倒了的上面踏过去！／别回顾，／讥笑者来了！／嗒！／嗒！嗒！／……／猛进！／猛进！／猛进！／无穷！／无穷！／无穷！（倒れた、／倒れた、／早く倒れた上を踏み越えて往け！／振り返るな、／誇り笑うものがやってきた！／タッ！／タッ！タッ！／……／突進！／突進！／突進！／無窮！／無窮！／無窮！）」⁸。

高長虹は、こうした人々に目覚めよと呼び掛ける主体に「勇士」と名付け、その在りようを『莽原』第8期（25年6月12日）に発表された散文「一個心の解剖」において詳らかにしている。

友人からの手紙の中に「熱狂的な、純粋な心」を見出した「勇士」は：「他觉得自己的力量立刻增加了许多，世界并不是整个的同他对立着，而是对立着两个世界，在这忽然出现的另一个世界里，住着很多纯洁的，勇猛的，美丽的，亮达的，有儿童的天真而又有老人的经验的青年，他自己便也住在这般世界里。（彼は自身の力が増し、世界全体が彼と対立しているのではなく、二つの世界が対立していると感じた、この突然出現したもう一つの世界には、数多の純粋で、勇猛で、美しく、理に精通し、子どもの純真さと老人の経験をもつ青年が住んでおり、彼自身もこのような世界に住んでいるのだ。）」⁹と彼と彼を取り巻く世界の変化を感じ取り、さらに「他觉得他自己突然变成一个从前所认为绝对不能有的勇士，只有诗的想像上为理智所管辖不到的境地才能够存在的，这勇士的拳头正如那一击可以打碎了全世界的。（彼は自分がこれまで絶対存在しえないと思っていた勇士に突然変わったと感じた、詩の想像上の世界でのみ、理知では管理できない境地にのみ存在し、この勇士の拳の一撃は全世界を破壊しうる。）」¹⁰と自らが全世界を破壊しうる力を持つ「勇士」になったと自覚する。しかし一方で「彼」の心には「失敗の兆候」も入り込んでおり、自身が「勇士」

から「ぼつり死んでしまったネズミ」のように縮小した幻覚に悩まされる。しかし、どこからかやってきた「猛烈な振動」の力を借りて力を回復させた「彼は幻覚を破壊し、「矢のような眼光」を以て遙か遠くを望む。

この【世界と「彼」個人の対立】から、【二つの世界の対立】という世界観の変化の背後には、ほぼ単身北京にやってきて孤軍奮闘していた状況から、魯迅や韋素園たち未名社同人たちと共に『莽原』を立ち上げたという環境の変化が存在している。また、この「勇士」という存在は、嘗て魯迅が提唱した「至誠の声をあげ、我らを善・美・剛毅に導く」「精神界の戦士」¹¹を想起させるものであり、当時頻繁に魯迅のもとを訪れていた高が、彼の深い影響下に置かれていたことを窺わせる。

また、高は『莽原』5期（25年5月22日）そして6期（25年5月29日）において、評論「新文学的希望」及び「中国与文学」を発表している。

「新文学的希望」において、高は中国の新文学はまだ発展途上であり、まず生命に目覚め、旧社会の思想を排除した人間が必要であると説く。そして現段階では幼稚な作品もやむを得ないが、進化を止めてはいけないとも主張し、そして現在の形ばかりの新文学者たちを批判し、反逆者の登場を待ち望む。

また「中国与文学」においては、中国の旧小説は自分語りに過ぎず、真の文学はまだ存在しない、と中国の文学の現状を「荒地」と厳しく批判している。

このように、高長虹は中国の新文学及び文学全体を分析する俯瞰的な視点をこの段階で獲得しており、これは後の上海狂飆運動での評論活動に繋がるものである。

1925年5月30日、上海での“五・三〇事件”¹²をきっかけに高長虹はさらに現実社会の問題と格闘することになる。『莽原』第9期（25年6月19日）から第25期（25年10月9日）にかけて、「弦上」の表題のもと発表された15篇の散文は、五・三〇事件、女師大事件¹³、『現代評論』派との論戦など、より具体的な問題に言及したものが多くを占めている。

「弦上」を書き始めた事情について、高は以下のように回想している：「这时正是『莽原』周刊初出版的时候，鲁迅也同我说，舆论是欢迎我的批评，不欢迎我的创作，所以让我多做批评。但我是爱我的创作，不爱那样的批评，所以我不大高兴那种舆论，但我也终于计意着要开始一些批评的。接着时局便起了剧变，『莽原』的稿件也略感缺乏，我于是便开始了那个使人厌恶的「弦上」了。这期间，景宋也有信赞美我的批评，说是我擅长的工作，劝我多做，天津也有一个不认识

的朋友来信鼓励我，因此种种原因，我便一直做到 15 篇。然而急就章第十一，那些东西其实没有一篇做得好的（『莽原』週刊を始めたころ、魯迅は、輿論が私の批評を歓迎しているが創作は歓迎していないと言い、そこで私に批評を多くやらせた。だが私は創作の方を好んで批評をあまり好んではおらず、そのためそういった輿論を喜ばなかったが、それでもついには批評をはじめた。続いて時局が切迫し、原稿が足りなくなったため、私は人に憎まれる「弦上」を始めた。許広平も手紙で私に向いた仕事であると批評を褒めて多く書くよう勧め、また天津の見知らぬ読者からも私を励ます手紙が来るなど、様々な原因があって、15 篇書いたが、間に合わせて作ったもので良い出来のものは 1 篇も無かった）」¹⁴ と言うように本人の意向というよりも魯迅や周囲の勧めに応じて始めたことが分かる。

「弦上」「序言」において「我的筋，将不徘徊于估价，不复顾忌于无须。（私の矢は、評価にうろうろせず、二度と無用に遠慮することは無いだろう。）」¹⁵ と宣言して放たれた批評の矢は、一体どこに向かったのであろうか、以下にその内容を概観していく。

「弦上」「1. 病中呓语」（第 9 期、25 年 6 月 19 日）及び「2. 救国声中」（第 10 期、25 年 7 月 3 日）、そして「3. 給反抗者」（第 10 期、25 年 7 月 3 日）はいずれも五・三〇事件をめぐる言説である：

「1. 病中呓语」では、中国人の熱しやすく冷めやすい国民性を批判し、絶えず救国の心構えを持ち、尽力すべきだと訴える：「这必须时时刻刻努力以图自存才行！如始终闲在平时，忙在临时，则忙呢，恐终不免于在亡国史上，只添一二比较可看的点缀而已！（絶えず努力して自らの存立を図るべきだ！もしも平時に安穩とし、時に臨んであくせくするならば、その頑張りは恐らく亡国の歴史の中で、少しは目に付く装飾を添えるだけだ！）」¹⁶。

「2. 救国声中」においては、五三〇事件をめぐる蠢く野心家、売国奴、学者などの投機的な対応を批判する一方、「在诚恳中奋斗的少数的朋友呵，祝你们永远奋斗下去好了，不要问目前的结果！目前的结果，太使你们伤心了！（誠実に奮闘する少数の友人たちよ、君たちは永遠に奮闘）」¹⁷ せよ、と呼びかけもする。

そして「3. 給反抗者」では、失敗に苦しむ反抗者を叱咤激励し、真の反抗者の登場を望む：「有敢以一人而敌全世界的吗？有在百败之后，而仍欢快的去赴最后的绝地的吗？（一人全世界に敵対しうるものはいるか？百敗の後、それで

も喜んで最後の絶体絶命の地に赴く者は?）」¹⁸。このように中国人の精神性の弱点を批判し、五・三〇運動に加わって帝国主義に抗う同志を激励する。

「弦上」「5. 蕭有梅与音楽家」(第12期、25年7月10日)、「6. 面子与愛国」(第12期、25年7月10日)、「11. 両敗俱傷」(第17期、25年8月14日)、「12. 造謠与更正」(第17期、25年8月14日)、「13. 閱『晨報』章士釗与通信社記者的談話之後」(第17期、25年8月14日)の5篇は所謂女師大事件を対象とした論説である。

「5. 蕭有梅与音楽家」では、芸術家は反抗者であるべきなのに女師大事件において体制側についた音楽家蕭友梅の言動を手厳しく批判し、「6. 面子与愛国」では、中国人の面子を重んずる気質が愛国に繋がることを願いつつ魯迅の論敵である陳源を攻撃する。

「11. 両敗俱傷」では、女師大の業務停止について論じており、女師大事件において楊蔭榆校長側も、学生側も痛み分けだとする報道に対して、学生側に非は無いと反論する。

「12. 造謠与更正」においては、引き続き女師大事件をめぐる『晨報』の報道姿勢を批判し、「13. 閱『晨報』章士釗与通信社記者的談話之後」では、校長側についた教育総長章士釗を厳しく批判し、彼に対して辞職を迫る。

このように女師大事件をめぐって、高は魯迅と同じく進歩的学生の側に立って彼らを擁護する一方、当局と体制側についた論客たちを舌鋒鋭く批判している。

「弦上」「4. 我有歹意了」(第10期、25年7月3日)、「7. 新文学中的新發現」(第12期、7月10日)、「8. 我的命令」(第13期、25年7月17日)、「9. 識時務者」(第14期、7月24日)、「10. 筆頭乱跳」(第14期、7月24日)、「14. 論“論是非”」(第24期、25年10月2日)、「15. 蒼蠅及其他」(第25期、10月9日)の6篇は、『現代評論』派の論敵たちや当時の世相を論じたものである。

「4. 我有歹意了」では、身を売ろうとする少女とそれを値踏みする若者たち、どちらに対しても批判的な目を向け、「7. 新文学中的新發現」では、何かと呪文のように“ラッセル”を持ち出す『現代評論』派の論敵孫宝瑀に対し、“孔子”を持ち出す旧文学の連中になぞらえあてこする。

また「8. 我的命令」では、留学帰りの学者・文学者たちが虚飾ばかりで内実を伴わないことを批判し、「9. 識時務者」においては、辛亥革命、袁世凱、三民主義、共産主義など時流におもねる者たちを断罪する。

「10. 筆頭乱跳」では、鉄でできた関所とそれを破ろうとする人々、というモチーフが魯迅の「鉄屋子」の譬えを連想させる、だが人々の試みはうまくいかず、それを応援する「私」は却って人々の攻撃を受け、「私」は空虚さを訴えもする。

「14. 論“論是非”」では、復活した創造社『洪水』掲載のエッセイ「論是非」のあいまいな評論姿勢を批判する一方で、期待の言葉をかけてもいる。そして「15. 蒼蠅及其他」では、『晨报附刊』の担当者徐志摩を「おしゃべり箱」と見下し手厳しく批判する。

以上7篇では時流に迎合する勢力や文壇の論敵に対する手厳しい非難が展開されており、こうした戦闘的なスタンスは、高長虹が後に『莽原』編集から身を引き、再び“狂飆社”独自の刊行物として創刊した同名の雑誌『弦上』にも引き継がれていく。

3. 2. 2 『閃光』と『給一』

高長虹が『莽原』週刊編輯に尽力し、批評という新たな分野に挑戦していたころ、詩作においても旺盛な創作活動を展開していた。1925年6月1日から7月23日にかけて（1－10、6月1日；11－20、6月2日、21－26、6月3日；27－42、7月9日、43－52、7月11日；53－58、7月12日；59－66、7月18日；67－72、7月20日；73－86、7月21日；87－100、7月23日）、『京報副刊』紙上に、後に詩集『閃光』としてまとめられるのべ100篇にも及ぶ連作短編詩を発表する。

本作は1篇あたりの分量がかなり短く、長くて数行、1行のみのものも存在する。全体を貫くストーリー性は見出しにくく、高長虹の経歴や精神世界に生起するものを思いつくまま歌っているようである、以下に主題が読み取れるものを幾つか取り上げてみよう：

【旧家庭への抵抗】

「2・乡村，家庭，／压在我的梦上，／我魔住了（郷里が、家庭が、／我らの夢にのしかかる、／私は夢に魔される）」¹⁹

「41・亲爱的弟弟，／回来吧！／在我的面前，／开拓着许多不同的路，／都可让我们自由地走去。（親愛なる弟よ、／戻ってこい！／私の目の前で、／多くの異なる道を開拓せよ、／我らが自由に行けるように。）」²⁰

【恋愛・女性】

「6・当我看见她时，／我早已睡在她身上了。／你要我埋葬在你的接吻里吗？

（私が彼女に会ったとき、／私は既に彼女の体の上で眠っていた。／あなたは私をあなたの接吻の裡に埋葬してくれるだろうか？）」²¹

「40・她的眼睛，／钉（町）住了我的心，／我看见我所遗失了的东西。（彼女の瞳は、／私の心を釘付けにした。／私は自分が失ったものを目にした。）」²²

【啓蒙・思想革命】

「56・力的表現者呵！／诗人呵！／科学的发明者呵！／革命的牺牲者呵！／不坠的生命，／只赖有你们支撑着。（力の表現者よ！／詩人よ！／科学の發明者よ！／革命の犠牲者よ！／墜ちざる生命は／ただ君たちによって支えられている。）」²³

「59・“孩子啊！／孩子啊！／你死了我该吃谁呢？”／无依的母亲在新冢旁哭着。／衔着野食的鸟儿骄傲地从她们头上飞过。（“子供よ！／子供よ！／

お前が死んだら私は誰を食えばよいのか？”／身寄りなき母親は新しい塚の傍らで哭く。／餌を銜えた鳥は傲慢に彼女の頭上を飛び越していく。）」

【狂飆運動】

「65・狂飆怒吼着，／软弱的人们都关在家里。（狂風が怒り吼え、／軟弱な人々は皆家に閉じこもる。）66・进发呵，有慧光的人们！／燃烧呵，有情热的人们！／发作呵，有勇力的人们！／流连忘返呵，有欲望的人们！／倒下呵，无生气的人们！／反抗呵，反抗一切的权威！（出発しよう、聡明な心を持つ人々よ！／燃やそう、情熱を持つ人々よ！／奮い起こせ、勇氣ある人々よ！／遊興に耽れ、欲望の人々よ！／倒れろ、精氣無き人々よ！／反抗せよ、全ての權威に反抗せよ！）」

このように、高の創作歴初期からのテーマである【旧家庭への抵抗】及び【恋愛・女性】を見出すことができるほか、当時高がその戦いの中に身を投じた【啓蒙・思想革命】も引き続き登場している。さらに彼が主宰する【狂飆運動】も作中のテーマとして言及され、まさに高長虹の精神史とでも言うべき作となっている。

『閃光』はのち1925年秋、北京貧民芸術団によって編集され、永華印刷局によって印刷発行された。1927年に『光与熱』に編入されたとき、138首が収録されることとなる。

また、この時期の詩作の特徴の一つとして、連作恋愛詩『給－』の創作の開始を挙げることができる。1922年の太原での出会いから、高長虹は石評梅への恋慕の情を「幻想与做梦」（北京『狂飆』）のような詩作の形で表明している。

そして『莽原』週刊において、改めて「給一」（「一に」）という表題のもと、石評梅への恋情を主題とする連作詩を発表し始め、これは上海に活動の拠点を移して以降も継続することとなる。

『莽原』週刊に発表されたのは第7期、第11期、第18期、第28期の4首であり、主として詩集『給一』の冒頭に収録されている。しかし『給一』については稿を改めて詳述するため、ここでは触れないものとする。

3. 2. 4 『莽原』改組

『莽原』週刊は、魯迅が主宰していたとはいえ、高長虹たち“狂飆社”と韋素園たち“未名社”の寄り合い所帯であり、両者の関係性の悪化が後に高長虹ら“狂飆社”メンバーを『莽原』から身を引かせ、狂飆運動の拠点を上海に移転させることに繋がる。そしてこの時の軋轢が魯迅と高長虹の関係性にも決定的な溝を生むこととなった。

兆候は高長虹が「弦上」を書き始めた1925年6月に既に現れていた；後年書かれた『走到出版界・1925, 北京出版界形勢指掌図』によれば、当時『莽原』内部には魯迅、荊有麟、尚鉞、高長虹と素園、霽野、叢蕪たちがそれぞれ派閥を形成しており、夏休みになろうかという時尚鉞が行ってしまい、素園たちの原稿が来なくなってしまう。原因は高長虹のみ原稿料を受け取っていることに彼らが不満を持ったからであり、これは実務に従事しながら経済的に困窮していた高に対する魯迅の配慮が存在したという²⁴。

続く1925年8月5日、高は『民報副刊』に散文詩「黒的条紋」を発表した。高自身は本作に手ごたえを感じていたにも関わらず、韋素園によって雑感として扱われて紙面の末尾に置かれるのが不満であった。そこで改めて9月25日『莽原』週刊第23期にも発表しなおしたという出来事もあった²⁵。

また同じく8月5日、この日韋素園が『京報』に発表した「『民報』十二大特色」という文章の中に「中国思想界の権威者魯迅」という文言があり、高長虹はこれを見て強烈な反感を抱く：

「于是“思想界权威者”的大广告便在『民报』上登出来了。我看了真觉得“瘟臭”，痛惋而且呕吐。试问，中国所需要的正是自由思想的发展，岂明也这样说，鲁迅也不是不这样说，然则要权威者何用？为鲁迅计，则拥此空名，无裨实际，反增自己的怠慢，引他人的反感，利害又如何者？（こうして“思想界の権威者”の大広告が『民報』紙上に掲載された。私はそれを読んで“臭気”を感じ、痛惜しまた嘔吐した。試みに問うが、中国に必要なのは自由な思想の発展ではな

いか、豈明（周作人か）もそう言っていたし魯迅もそう言わなかったわけではない、そうであるなら権威者なるものは何の役に立とうか？魯迅のために計るに、この虚名を擁しても実際には裨益するところはなく、かえって自身の怠慢を増し、他者の反感を買い、損得もまたどうなることか？）²⁶。

8月10日夜、高は魯迅のもとを訪れており、恐らくはこの時『民報副刊』の広告について話したと思われるが、魯迅の返答は彼を満足させるものではなかった：「我又见了鲁迅，他问及民副投稿事，我说了我的不满意。他很奇怪地问：“为什么？”我便说了“那个某人……所以你……”的公式。鲁迅默然。停了一歇，他又说道：“有人，就说权威者一语，在外国其实是很平常的！”（私はまた魯迅に会い、彼は『民報副刊』の投稿の件を尋ね、私は自分の不満を伝えた。彼はとても不思議そうに尋ねた：“なぜ？”私はそこであの“誰それが……そのためあなたは……”の公式を話した。魯迅は黙ってしまった。暫くしてから、彼はまた言った：“誰かが一、権威者という言葉は、外国では実際のところごく普通なんだ！”）」²⁷。

高長虹の権威に対する反感、鋭敏かつ潔癖な眼差しは、同じ陣営に在って共に戦った魯迅にも向けられ、以後彼の文章からは自身の運動や北京での生活に対する閉塞感が漂うようになる。

8月28日、『莽原』週刊第19期に発表した散文詩「ASR的一頁」において、高は自らの運動と北京での生活の行き詰まりを歌う：

「把愤怒一丝一缕的按期的抽着，结果只引起自己的火来，焰腾腾的，首当其冲的，便仍是自己了，于是，我便倒在自己的火里。（憤怒をひとすじまたひとすじと期限通りに繰っても、結果ただ自分に火を点けただけで、焰は燃え盛り、真っ先にその犠牲となったのは、やはり自分だった。）」²⁸

「但我终于明白我已被包围了。包围我的便是这座古怪的大城，这座只有灰土和粪，只有灰土的人和粪的人的大城（だが私は遂に自分が既に包囲されていると知った。私を包囲しているのはこの奇怪で巨大な城だ、この土埃と糞土しかない、土埃でできた人間と糞土でできた人間しかない巨大な城だ）」²⁹

「期限通り」に憤怒を繰っても、「自分に火を点けただけ」で自分を犠牲にただけだと無力感に苛まれ、自身が「土埃と糞土しかない」巨大な城、北京に「包囲」されていると孤独感を深めている。

続く9月に創作された小説「生的躍動」³⁰においても、引き続き同様のイメージが登場している、以下にその梗概と共に紹介していく：

「1」において主人公「彼」の貧困とP城（北京）での生活と活動への不満がまず語られ、「2」で「抛り所」を失った「彼」は「一人の美しい女性」に思いを馳せることで「精神を繋ぎ止めようと」する。「3」「彼」はT城（太原）で幼い兄妹の家庭教師をしながら文筆生活を送ることを妄想するが、「地上の天国」の生活を妄想することにも飽きてしまう。「4」「彼」は毎晩のように決別したはずの故郷や家族を夢に見て、現在彼が送る近代的な生活を懐疑し、自身の心理を分析し悪夢の原因を解明する；「他想着，他是一直到现在都在被什么包围着。起先他并没有觉得，他的少年时代便从那种模糊中夹杂着幸福溜过去了。后来大发见了传说，他于是厌恶家庭了。后来他发见了家庭，他于是厌恶了社会了。后来他发见了社会，他于是厌恶了自己的。他什么都厌恶，于是包围着他的也便越发严密起来，而且分工了，那白天不能够向他睁开眼睛的，便穿起夜袭的衣罩进他的死海中去。（彼は思う、彼はずっと今まで**何かに包囲されてきた**。はじめ彼は全く感じ取れなかった、彼の少年時代は曖昧なうちに幸福に取り紛れて過ぎ去ったからだ。後に彼は伝説を発見し、そこで彼は家庭を嫌悪した。後に彼は家庭を発見し、彼はそこで社会を嫌悪した。後に彼は社会を発見し、そこで彼は自分自身を嫌悪した。彼は何もかも嫌悪し、そこで**彼を包囲するものは**どんどん密になり、そして役割分担をするようになった、あの昼間彼に向かって目を見開くことができないものは、夜襲の衣をまとって彼の死海の中に潜り込んでいく。）」³¹。「5」では「彼」は借金に追われ家賃の支払いにも窮する有様であり、「6」では旅立つ友人二人を駅に見送って彼らを羨む。「7」において「彼」は生活の苦痛に耐えかね、「生活の形式」を変えようと決心し、最後の「8」で彼は数多の「手」によって夢から覚め、P城を離れる。

こうした【「包囲」され孤立する感覚】は、魯迅との関係性が悪化するにつれてますます高の中で増殖していく。

9月26日夜、魯迅を訪ねた際、『閃光』5冊、汾酒1本を送ったが、魯迅は酒を受け取らなかった。『閃光』は高長虹の第2作品集であり、これらの小詩はもともと『心的探検』（『烏合叢書』第四種）に収録される予定だったが、なかなか出版されなかったため、高長虹は狂飆社の名義で自費出版した。この時の経緯が高の魯迅に対する感情をさらに悪化させている。

さらに10月、“狂飆社”同人の向培良と高歌が北京に戻ってきて、皆で『狂飆』不定期刊の出版を相談した。『狂飆』不定期刊に対して、魯迅はもともと小説を書くと言っていたが、後に翻訳にすると聞いた、しかし9月1日から絶

えず病院に行っていたため、最後は翻訳原稿すらなくなった。このため、多くの“狂飆社”同人が不満を感じ、高長虹は常に魯迅と同人たちとの間に立たなければならなかったという³²。

10月18日、『京報副刊』第301号から11月3日317号にかけて連作散文「反応」を発表する。この連作散文の内容は中国人の心理の解剖から神の存在、身辺の雑事に至るまで多岐にわたるが、莽原社内部の対立や当時の高長虹の孤立した心境を窺わせる記述が以下のように存在する：

「也许有一天，一切人都站在一面，只剩我同我自己站在那反对的别一面吗？那时，我将要如何奋勇地作战，然而我已感到荒凉了！所以人仍然是社会的动物。（ひょっとしたらいつの日か、全ての人が一方向に立ち、ただ私だけがその反対側に立つことになるのだろうか？その時、私はどれほど勇気を奮って戦うだろう、だが私は既に荒涼たる気分を感じているのだ！人はやはり社会的動物なのだから。）」³³

「我觉得因袭思想是坏的，特殊阶级是坏的，这些在人类的进化上是有极大的阻力的，我于是攻击起他们来了。惭愧我没有力量，还没有见过活的血，我只可以把那血写在纸上。然而，我便做了人们骂我目空一切的根据，而且那骂我的人，又常是那些被我所攻击的东西所压迫的人。究竟谁是我的敌人，谁是我的朋友呢？（私は、因習は悪だと思ひ、特権階級も悪だと思ひ、これら人類の進化において極めて大きな障害となっているものに対し、私は攻撃を加えてきた。恥ずかしいことに私には力がなく、まだ本物の血を見たことがなく、その血を紙の上に書くほかない。だが、そのせいで人々が私を傲慢と罵る根拠を作ってしまう、その上私を罵る人は、いつも私が攻撃を加えているものによって压迫されている人たちなのだ。結局誰が私の敵で、誰が私の友人なのだ？）」³⁴

こうした無力感と孤立感が極まった結果、10月23日、『莽原』週刊第27期に発表した「噫、我友！」において高は「わが友」に対して別れを告げており、廖久明は、この友人は魯迅のことを指すと考えている³⁵：

「噫，我友！我的小屋将迎你作新主人，你将何恃而入据？我已将被放逐了！／噫，我友！让我们携手而投彼深山大泽中，而各试其粗暴之身手，好吗？否则，我们将别了！／噫，我友！我愿独行而独逝，噫，我们别了！（ああ、わが友よ！我が楼閣は君を新たな主人として迎えようとしている、君は何を頼みに入居しようというのか？私は既に放逐された！／ああ、わが友よ！手を携えてかの深山大澤の中に行こう、そして各々粗暴な手並みを試してみよう、どうだい？さ

もなくば、我らはお別れだ！／ああ、わが友よ！私は独り行き独り逝こう、ああ、お別れだ！)」³⁶

事実、この時期『莽原』週刊は改組を計画していた。魯迅は『莽原』を週刊から半月刊に改めて韋素園ら未名社に発行を任せ、高長虹に編集を担当させることを提案したが、高長虹は編集担当を辞退しており、この間の経緯は「噫、我友！」の内容に正に符号していると言える。そして11月27日、『莽原』週刊が32期まで発行された後、半月刊に改められ、以後『莽原』と高長虹の関係は希薄なものとなる。

1925年11月、高長虹は“狂飆社”同人閻宗臨を連れて太原に戻り、彼の為にフランスで苦学するための旅費を工面する。しかし11月初めから翌26年1月末まで、3カ月近く戦争の影響で汽車が不通となり、高は太原に足止めされてしまう。

この時期、高は小説「遊離」を完成させ、のち1926年『京報副刊』紙上において連載の形で発表する³⁷。本作は一人称の語り手「我」を採用した私小説的な作品であり、実際の書信も挿入されている、以下にその概略を示していこう：

「N」と言う名を持つ「我」は、既に実家と手を切り、「老实说，我愿意毁灭了一切的家庭，并且连家庭的情感（全ての家庭と、家庭にまつわる感情を滅ぼしてしまいたい）」³⁸と願っている。しかし一方で病床の母親にも可愛い息子にも会いたいと望んでもいる。

戦争で列車が止まり、足止めを食らう「我」は上海に行くことを夢見ながら季節は冬になろうとしている。「我」は北京に残してきた友人や恋する女性「X」に思いを馳せる。

「我」はまた愛する女性宛に手紙を書き心中の思いを打ち明ける：「你，我数年来所悬望而不能得到片言以慰我心怀的一个美的女神，你忽然从你那沉默的宝座上走了下来，捧给我你的心看，你知道我那时是如何地惊极而颤，我是在发现了如何稀有的珍奇！我昏醉了，我倒在你的美的下面，我从最深的心底下宣告：我永远是你的所有了！（君は、数年来求めて得られなかった言葉で私の心を慰めてくれた美の女神だ、君は突然沈黙の玉座から降りてきて、君の心を見せてくれた、あの時私がどれほど驚き震えたか、私がどれほど稀有なものを発見したか、君は知っているだろうか？私は酔いしれ、君の美のもとに倒れた、私は心の最も奥深いところから宣告する：私は永遠に君の所有物だと！）」³⁹。そ

して「君」の心変わりに恨み言を言いもする。

「我」は P、H、Y、D4 人の友人の署名がある手紙を受け取り、北京に早く戻ってくるよう請われ、「亲爱的弟弟们，我要回去！我要回去排解你们的寂寞，分享你们的痛苦！（親愛なる弟たち、私は戻る！私は戻って君たちの寂寞を解きほぐし、君たちの苦痛を分け合おう！）」⁴⁰ と呼びかける。

しかし「我」は芸術を呪い、「世间只有一首诗，只有一个真理，只有一件是值得叫做革命的，那便是人类的大灭亡。而人，却只是坐以待毙的蠢物。（世間にはただ一つの詩、ただ一つの真理、ただ一つ革命と呼ぶに値するものがある、それは人類の大いなる滅亡だ。だが人々は、座して死を待つだけの愚物なのだ。）」⁴¹ といった厭世的な考えに陥りもする。

末尾は友人や弟たちへの書信で占められ、北京での活動の行き詰まりを友人たちに告げ、新たな展開を訴えている：「我可以无须对你说，“我的计划完全失败了”吧！这是我们时常可以听到的话，所以，我也相信你并不会受一点小惊。事实很表现的明白，我们所处的是完全孤立的地位，我们得不到人们的帮助，也不必要人们的帮助，让我们挺起身子来担当一切呵，这是在需要我们用更大的力量的时候啊！（君には言うまでも無いことだが、“私の計画は完全に失敗した”！これは我々がいつも耳にする言葉だ、そのため、私は君が驚くことも無いと信じている。事實は明白に説明している、我々は完全に孤立した地位に居ると、我々は人々の援助を得られないし、必要ともしていない、我らはまっすぐ立って全てを担おう、これは我らの更なる力を必要とする時なのだ！）」⁴²。

このように、本作は当時の高長虹の境遇と心境を反映した私小説的な作品であり、「狂飆運動」の北京での活動の失敗と「狂飆社」の孤立を認め、新天地上海での再出発を希望する内容となっている。

以上『莽原』週刊時期の高長虹の作品について概観してきた。この時期の作品の特徴としては、まず「弦上」に代表される活発な評論活動を挙げることができる。魯迅と共に『莽原』を立ち上げ、中国人の精神性を改革しようとする思想革命の陣営に加わった高長虹は、中国社会の現状に対して厳しい批判の眼を向け、人々に目覚めよと呼び掛ける（「綿袍里的世界」、「什么」、「刹那的形象」、「永久」）。そうした人々の目覚めを導く存在である「勇士」は、失敗の兆候に思い悩みつつも強かに遙か先の未来を見据える（「一個心的解剖」）。

魯迅ら周囲の勧めから始めた「弦上」においては、五・三〇事件、女師大事件といった現実の問題に踏み込んで権力やそれにおもねる人々を強烈に非難し

(「1. 病中呓語」、「2. 救国声中」、「3. 給反抗者」、「5. 蕭有梅与音楽家」「6. 面子与愛国」、「11. 兩敗俱傷」、「12. 造謠与更正」、「13. 閱『晨報』章士釗与通信社記者的談話之後」、さらに当時の醜惡な世相を斬る一方、『現代評論』派を始めとする論敵との論戦を展開した(「4. 我有歹意了」、「7. 新文学中的新發現」、「8. 我的命令」、「9. 識時務者」、「10. 筆頭乱跳」、「14. 論“論是非”」、「15. 蒼蠅及其他」)。

またこの時期には中国の新文学の現状を俯瞰的な目でとらえる視点を獲得しており(「新文学的希望」、「中国与文学」)、これは後の上海狂飆運動期の活動にも繋がるものとなる。

しかし、韋素園を始めとする未名社系の同人との軋轢がきっかけとなって、魯迅との関係性が悪化し、失望を深めた高長虹は、周囲に「包圍」されている感覚に悩まされ孤立感を募らせる(「ASR 的一頁」、「生的躍動」、「反応」)。ついに高は魯迅に別れを告げ(「噫、我友!」)、週刊から半月刊に改組されたタイミングで『莽原』から距離を置き、北京を離れて新天地上海での再出発を願う(「遊離」)。

このように、『莽原』週刊期の高長虹の作品には、【中国人の精神性の改革】や【権力との闘争】といった主題が登場し、より現実には踏み込んだ姿勢を見出すことができる。しかし『莽原』週刊改組をめぐる【失望と孤立】の色彩が色濃く現れ、これは次の『弦上』週刊期にも引き継がれていく。

3. 3 『弦上』週刊(1926年2月—1926年8月)

1926年1月下旬、高長虹は魯迅から旅費の援助を受け、ようやく太原から北京に戻ることができた。また2月12日・13日には鄭效洵を伴って魯迅を訪ね、『弦上』週刊出版のことを相談するなど、この時点において彼との関係を完全に断ったわけではなかった。

2月14日、『弦上』週刊を創刊する、本誌は同年8月1日停刊となるまで、のべ24期発行されている。64折版の小型本で、毎号8頁、途中3期拡大号を出しており、毎号1000部印刷した。1－9期は高長虹・鄭效洵が、10－24期は高歌が編集を担当している。

『弦上』は前節で論じた『莽原』週刊掲載の連作評論「弦上」のスタンスを引き継ぐものであり、軍閥批判を含む現実社会に関する評論や中国人の精神性に対する批判、近しい人々への書信、ニーチェなど外国作品の翻訳、がその主な内容となっている。以下にその内容を概観していこう。

3. 3. 1 中国人の精神性との対峙

『弦上』週刊においても、高長虹は引き続き思想革命に従事し、中国人の精神性を批判する文章を執筆し続けた：

第1期（26年4月14日）に発表した散文「没有内容」においては、友人たちの郭沫若をめぐる議論から、郭の文章に「内容が無い」という発言が出ると、そこから現状の中国に思いを馳せ、果たして現在の中国に内容があるのか？と自らに問うている。

また第2期（26年4月21日）掲載の「四条腿与八条腿」では、抗う声を上げずに享楽にふけり、新しい世代に道を譲らない人々に憤る：

「你们活着，而使真的生人抬不起头来！何时才是你们下去的时候呵！何时才是新生者们上来的时候呵！（君たちは生きる、そして真の活きている人々に頭を上げさせない！何時になったら君たちは下りていくのか！何時になったら新たに生まれた者たちが上がってくる時が来るのか！）」⁴³。

第3期（26年4月28日）発表の「关于事实的几句说话」においては、実用のみを重視し、思想や文学を軽視する現代の中国人を「無用の人々」と痛烈に罵倒する：

「没有思想，没有艺术，社会的黑暗，亡国，这些在一个国家上，都是些极可耻辱的事实，但是我们注重事实的中国人，却并没有注重到。如其对于一些有价值的事实而无所事事，则有什么权利配自命注重事实呢，你们真的无用的人们！（思想が無く、芸術も無く、社会は暗黒で、国は亡びようとしている、これらは一つの国家において皆極めて屈辱的な事実だ、だが我々事実を重視する中国人は、まったくそのことを重視しない。もし価値ある事実に対して何ら為すところが無いのなら、何の権利があって自ら事実を重視していると言う事ができるのか、この真に無用の人々よ！）」⁴⁴。

このように高は引き続き中国人の精神性を批判し、その思想を革めることを目指している、但しこの時期の文章において、前節までのような人々の目覚めを促す言葉を見出すことは無く、そこに彼の深い失望をうかがい知ることができる。

3. 3. 2 3・18 事件

1926年3月18日、北京において、段祺瑞政権による反軍閥、反帝国主義デモに対する弾圧事件が発生する。この日を指して、魯迅は「三月十八日、民国以来、もっとも暗黒なる一日」⁴⁵と呼んだ。高長虹もこの事件に関する文章を

複数『弦上』誌上に発表している：

まず第7期（3月28日）発表の「冰人冰語」においては、三一八事件を引き起こした軍閥段祺瑞や章士釗に対して「我觉得段祺瑞章士釗之流，老早就该杀，不必等到现在。（私は段祺瑞や章士釗といった類は、とくに殺すべきであり、現在まで待つ必要も無いと感じていた。）」⁴⁶と激烈な言葉でその怒りを表明している。

また第8期（4月4日）に掲載された「給一個靈魂」では、三一八事件で犠牲となった人々を追悼し、道は違えども同じ目的のもと戦うことを宣言する。

さらに「論三月十八」では「敌人们笑了！我们是这样的可怜！让我们也有笑的一日，让我们自己把那最后的胜利赐给我们吧！（敵たちは笑っている！我々はこんなにも哀れだ！いつか我々にも笑う日を、我々自身に最後の勝利を与えたまえ！）」⁴⁷と権力者への激しい怒りと未来の勝利への願いをつづっている。

そして「三月十八事件及其前後」では3月18日の事件が既に過去のものでとされつつあることに憤り、政府とはもともと革命を圧迫するものであり、今回の虐殺もその一端に過ぎないのだ、と権力への不信を訴えている。

このように暴力に拠る言論封殺を行う権力とそれに追従する人々に対する激しい怒りとそれを早々に忘却してしまう人々に対する失望を読み取ることができる。

3. 3. 3 上海へ

『弦上』第6期（3月21日）に発表された一幕劇「狂飆」は、従来の「狂飆」を題した作品：「狂飆之歌（序言）」（24年11月16日）、「狂飆之歌（青年）」（24年11月23日）、「『狂飆』週刊宣言」（25年3月1日）とはかなり趣を異にしている。上記3篇がいずれも人々に目覚めて立ち上がり、現状との闘争を呼び掛ける内容となっているのに対し、この一幕劇「狂飆」は、熱を失った老人が主人公となっており、「狂飆」も氷に閉ざされ彼は子供になりたいと願う。最後の「狂飆」によって目覚めた老人は別の場所に行こうとするが倒れ伏す、と言った内容になっている。自身の文学流派の名を冠した作ではあるが、高揚感などは感じられず、むしろ寂寥感が漂う：

「今天的風很大，这是最合适我的日子！（猛省）今天不便是狂飆时代的最后的日子吗？我的末运不是已经到了吗？（今日の風は強い、私にうってつけの日だ！（猛省）今日はシュトゥルム・ウント・ドラング（狂飆時代）最後の日じゃないのか？私の滅びの運命は既にやってきたのか？）」⁴⁸

「现在是一个结冰时代，他来代替狂飙时代，而且代替了那当来的春。（今は結氷の時代だ、それは狂飆の時代にとって代わり、来るべき春にとって代わる。）」⁴⁹

「一个世界只有一个人！一个没有妻子，没有孩子，没有朋友，没有时代，没有希望的老人！（他突然清醒）。最后的狂飙来了 - 我要去 -（他倒下。）（世界には老人一人存在するのみ！妻も居らず、子供も居らず、友人も居らず、時代も無く、希望も無い老人が！（彼は突然目覚める。）最後の狂飆がやってきた—私は行かなければ—（彼は倒れた。））」⁵⁰

ここには北京にやってきたばかりの高揚感はなく、熱を失い別の場所に逃避を求める高長虹の姿が重なる。

1926年4月16日、高長虹は新天地で再び狂飆運動を展開するため、鄭效洵を伴って上海に向かう。

北京を離れる前後の状況について、高長虹は後年執筆した書簡体小説「春天的人们」の中で年代や設定を少し改めた形で言及している。それによると当時父親を亡くし（1926年3月2日逝去）、母親も不治の病の床に在ったため、高には家族の生活費と母親の医療費などの経済的負担がのしかかり、また当時一緒に教育事業（狂飆運動を指す）をやっていた仲間が散り散りになり、情勢的にも北京に留まりづらくなったため上海に拠点を移したのだという⁵¹。

しかし、一幕劇「狂飆」や『弦上』週刊に見いだされる高長虹の挫折感、孤立感から考えるに、高の内面的要素が強く彼を動かしたと考えるべきであろう。

ここで『弦上』週刊誌上の作品についてまとめておこう。この時期の作品は基本的に『莽原』週刊期の連作評論「弦上」の姿勢を引き継いでおり、中国人の精神性に対する批判（「没有内容」、「四条腿与八条腿」、「关于事实的几句说话」）と三一八事件をめぐる軍閥への激しい攻撃と権力に対する不信（「冰人冰語」、「給一个靈魂」、「論三月十八」、「三月十八事件及其前後」）が中心となっている。しかしこの時期の作品からは未来への希望よりも失望と孤立感をより色濃く感じることができ、その背後には北京狂飆運動の失敗と魯迅との決別が存在していると考えられる。

おわりに

以上、高長虹の習作期から北京狂飆運動期にかけての作品及び思想について概観してきた、ここで上篇の内容も含めて一度まとめておきたい。

高長虹の文学活動は海外の詩人の翻訳から始まり、初期作品においては【旧家庭からの脱出】と【自然、夢、真理、自由への憧れ】といったテーマが多くを占める。太原に拠点を移して“狂飆運動”を開始した時期の作品では、【新たな人間関係の中で生まれた“恋愛”の追及】、そして【社会変革の志向】といった主題への転換が見出される。

北京に拠点を移して北京『狂飆』週刊を発行した期間の高長虹の作品には、【“狂飆運動”を通じた啓蒙運動】と【現実社会への批判】といった新たなテーマが加わった上、【石評梅への恋慕】といったテーマも引き続き存在している。

魯迅の知遇を得て『莽原』週刊を舞台に思想革命に取り組んだ時期においては、【中国人の精神性の改革】や【権力との闘争】といった主題が登場し、より現実には踏み込んだ姿勢を見出すことができる。しかし『莽原』週刊改組をめぐって【失望と孤立】の色彩が色濃く現れるようになり、それは続く『弦上』週刊時期においても消えることはなかった。

冒頭で提起したように、本研究の最終目的は高長虹の創作と思想の全体像の描出である、上海に拠点を移して以降の“狂飆運動”はどういった展開を見せるのか、高長虹の創作及び思想にどういった転換が見られるのか、引き続き考察していきたいところではあるが、あまりに紙幅を重ねてしまった。残った問題については稿を改めて論じていくこととしたい。

¹ 本稿において使用する中国語の簡体字・繁体字は、引用部分を除いて出来る限り日本語の新字体で表記するものとする。

² 『魯迅全集』15巻 2005年 人民文学出版社 p538、翻訳は『魯迅全集』17巻 1985年学習研究社による

³ 「走到出版界・1925、北京出版界形勢指掌図」『全集』2巻 p195

⁴ 『全集』1巻 p137

⁵ 同上 p141

⁶ 同上 p169

⁷ 同上 p 135

⁸ 同上 p136

⁹ 同上 p145

¹⁰ 同上

¹¹ 『魯迅全集』1巻 2005年人民文学出版社 p102、翻訳は『魯迅全集』1巻 1985年学習研究社を参照した。

¹² 1925年5月15日に上海日本人経営の紡績工場で発生した労働者射殺事件をきっかけに、5月30日に大規模抗議デモが上海で実施された。これに対して上海租界警察が発砲し、多数の死傷者が出た事件を指す。この事件を契機に反帝国主義運動が中国全土に波及し、これを“五・三〇運動”と呼ぶ。

¹³ 1925年、許広平ら進歩的女子学生による北京女子師範大学校長楊蔭榆の排斥運動、当時非常勤として勤務していた魯迅は学生の側に立って、校長派の論客と論戦を交わした。

¹⁴ 「時代的先駆・批評工作的開始」『文集』1巻 p501

¹⁵ 『全集』1巻 p203

¹⁶ 同上 p205

¹⁷ 同上 p205

¹⁸ 同上 p 206

¹⁹ 同上 p41

²⁰ 同上 p48

²¹ 同上 p42

²² 同上 p48

²³ 同上 p50

²⁴ 『全集』2巻 p202

²⁵ 「時代的先駆・批評工作的開始」『文集』1巻 p501

²⁶ 「走到出版界・1925、北京出版界形勢指掌図」『全集』2巻 p204

²⁷ 「走到出版界・1925、北京出版界形勢指掌図」『全集』2巻 p204

²⁸ 『全集』3巻 p60

²⁹ 同上

³⁰ 1925年12月『狂飆』不定期刊に発表され、後小説集『遊離』に収録される。

³¹ 『全集』2巻 p387

³² 「高長虹年表」廖久明『全集』4巻 p 593

³³ 『全集』1巻 p190

³⁴ 同上 p191

³⁵ 『年譜』 p98

³⁶ 『全集』1巻 p187

³⁷ 『京報副刊』3月1日第425号、3月2日第426号、3月3日第427号、3月4日第428号、3月7日第431号、3月8日第432号、3月9日第433号、3月10日第434号、3月11日第435号に発表された。

³⁸ 『全集』2巻 p396

³⁹ 同上 p405

⁴⁰ 同上 p 415

⁴¹ 同上 p418

⁴² 同上 p420

⁴³ 同上 3巻 p 83

⁴⁴ 同上 1巻 p236

⁴⁵ 『魯迅全集』3巻 人民出版社 2005 p280

⁴⁶ 『全集』3巻 p102

⁴⁷ 同上 1巻 p237

⁴⁸ 同上 1巻 p180

⁴⁹ 同上 1巻 p181

⁵⁰ 同上

⁵¹ 「春天的人们」1928年4月『全集』1巻 p588

* 本稿は、令和元年度（2019年）科学研究費補助金（課題番号19K00371）による研究成果の一部である。